

合理性の民主主義から生活形式の民主主義へ

シャンタル・ムフの闘技理論を手かがかりに民主主義教育を考える

中村（新井）清二
首都大学東京大学院
nacamuraiseiji@gmail.com

1 問題の所在

民主主義社会にとって、その社会における民主主義への忠誠を維持することは、一般的課題である。近年、他の民主主義諸国と同様、日本においても、人びとの公共的な事柄への関心の低下、多様性のもとでの統合の困難といった、民主主義社会の根幹に関わる問題が指摘されている。この問題は、現在もっとも広範に議論されている「熟議民主主義〔deliberative democracy〕」論において、政治に積極的に関与する市民の形成という課題として、次のように、議論されている。

熟議民主主義論は、まず、民主主義を、多様な人々からなる社会での合理的な集団的意思決定（合意）過程として理解する。その上で、合意形成のためには、①公共的な議論に多様な人々が等しく参加できる条件が整えられていることを前提とし、②公共的な議論に参加する人々が、自律的に思考し、分別のある議論を行い、また、他者の展望や経験を認め、他者に寛容であることが条件とされる。言い換えれば、民主主義が機能するためには、参加の条件整備に加えて、参加者が他の参加者に対して権力的ではない関係を取り結びつつ議論を行えるよう、十分な同一性（自律や寛容といった徳）を人々が備えている必要がある、とされる¹。

しかしながら、民主主義社会にとって、市民の形成に加えて、格差社会という深刻な事態もまた、目をそらすことができない課題となっている。市場における他者との競争を範として社会関係を捉える新自由主義が日常生活に深く浸透した結果、人生のなかで遭遇する困難が、制度の綻びに由来するものであっても、競争における個人の過失（自己責任）として誤認されてしまい、すでに社会的に周辺化された人々の生存基盤はよりいっそう脆弱化し、同時にこれまで比較的安定層だともまれていた人々も不安定化することとなった。その際、自己責任論が、困難を被る人々に、制度の綻びの修復、格差・貧困の是正を政治的権利の行使によって求めることが実際的な選択肢ではないという誤認をもたらし、脱政治化させたことは見過ごせない。

このことが意味するのは、政治に参加するだけでなく、新自由主義に対抗する民主的市民の形成が、民主主義論の課題であるということである。

ところが、上述の熟議民主主義論は、新自由主義に抗することを十分に位置づけることはできない、と政治学者のシャンタル・ムフ（Chantal Mouffe）は指摘する。熟議民主主義論は、民主主義を集団的意思決定（合意）として捉えており、合理的な合意の条件に焦点をあてて論じたものである。とすれば、合理的合意の条件が提供するものは、新自由主義への対抗ではなく、むしろ、それとの合意への筋道である。政治過程一般を合意形成過程としてしまうことは、新自由主義が経済的、政治的不平等を助長するにも関わらず、それとの対抗が位置づけられないのである。

新自由主義が、制度上の問題さえも私的な行為の結果として錯誤させ、当事者自らの対抗とし

¹ シチズンシップ教育論の多くは、この熟議民主主義論の枠組みを引き取って展開されている（Kenneth Strike (1994)、Stephen Macedo (1995)、Eamonn Callan (1997)、Penny Enslin et al. (2001)）。

ての政治的権利の行使を実質的に阻んでいるにもかかわらず、熟議民主主義論は、そうした対抗を正当に位置づけることができない。ムフは、民主主義を、合意ではなく、対立や衝突において理解しなければ、新自由主義への対抗、すなわち、経済的、政治的不平等の克服へと結びつかないという。

冒頭にも述べたように、民主主義社会にとって、その擁護と発展を確信する市民の形成 いかえれば民主主義教育は、一般的な課題である。さらに、新自由主義への対抗という課題をかさねて、民主主義教育を構想しなければならない。その構想にとって鍵となるのは、ムフに従えば、対立や衝突が政治の核に位置づけられた、民主主義の擁護と発展を確信する主体である。

本発表では、ムフの議論と、その理論から構想された民主主義教育（民主主義の学習）を描き、その上で、民主主義的主体化の条件について考察したい。これまで、ムフの議論は、「敵対 antagonism」という概念や「情念」という概念を中心に論じられてきた。本発表では、民主的主体の同一性および民主主義的合意についてムフがどのように考えているかを述べる。

2 闘技民主主義理論

社会から除去できない「敵対性」

政治学者のシャンタル・ムフは、熟議民主主義の構想が、新自由主義にラディカルに対抗するには不十分だとする。

熟議民主主義論においては、集団的意志決定（合意）を民主主義の基本的な考えとしており、そのため、意見の不一致や対立は、政治過程のなかで合意へと向けて議論が収斂していくなかで、最終的には取り除かれるものとされる。そのため、新自由主義への異議申し立てもまた、合意へ収斂していくなかで、取り除かれてしまうことになる。ムフは、新自由主義にラディカルに対抗するためには、民主主義を、合意に焦点を当てるのではなく、人間関係が本質的に「敵対性 [antagonism]」を孕んでいることを前提としなければならないとする。「敵対性」が人間社会から消滅することは決して無く、そうだからこそ民主主義という政治的実践の存在意義がある、というのである。

敵対性を中核に置くムフの民主主義理論（闘技的複数主義 [agonistic pluralism]）とは、敵対性を、他者を討ち滅ぼすべき「敵 [enemy]」とみなす暴力的次元からを掬いだし、民主主義的な「ゲームのルール」の範囲内で「対抗者 adversary」として互いに競合すること（「闘技 [agonism]」）として構想するものである。

民主主義的な「ゲームのルール」の範囲内において対抗者同士が対立する主題という点でも、熟議民主主義論と異なる。熟議民主主義論がいくつかの規範的命題を議論の主題から外すことで合意を担保するのとは異なって、対立の主題となるものに、民主主義を構成する原理である自由や平等も含まれる。ムフの民主主義的な公共領域は、熟議のそれよりも開かれているといえよう。そして、対立や衝突が完全な和解に到達するものではない、つまり、敵対性は決して消失しない、とされる。（もちろん、合意という論点は闘技理論においてもあり、それは後で述べる）

ムフによれば、そもそも、自由と平等という最終的には両立しない二つの論理の接合から帰結したものがリベラル民主主義体制であり、その両者が完全に和解することはありえない。もちろん、完全な和解を望めないことと、没交渉であることとは異なる。リベラル民主主義体制の今日に至る展開を促してきたのは、完全に和解しあえない対立や衝突であり、このこと自体が、民主主義の特徴が「合意」ではなく「闘技」にあることの証左だという。

ただし、われわれ／彼らという対立をもたらす「境界」は、比較的長い場合もあるがあくまで一時的に生じるものであり、いちど引かれた線が固定化され永続するわけではない。また、その両者の交渉は、双方の原理がそのまま維持されたまま遂行されるのではなく、「汚染」の関係であるという。その意味は、二つの原理の対立によって、それぞれの論理がもう一方の同一性を変化させるということである。

ムフにとって、緊張関係が除去されれば合理的な合意に到達しうる、という熟議民主主義論の想定は「幻想」である。その考えには、緊張関係にあるもの同士の対立や衝突と、交渉を通した両者の汚染が民主主義のダイナミズムを生み出してきたという逆説が排除されているからである。

闘技的な民主的主体としての政治

対立や衝突を度外視しないとしても、民主主義政治とは何を指す営みなのだろうか。ムフは次のように述べる。「「闘技的複数主義」の視座から見ると、民主主義政治の目標は、「彼ら」を、もはや破壊されるべきひとつの敵としてではなく、ひとつの「対抗者」として知覚されるような仕方で構築することにある」（Mouffe 2000 : 101=2006 : 158）。ここで示唆されているのは、闘技民主主義を機能させるためのなんらかの条件の存在である。「敵対を闘技へと変換する」なんらかの条件が要請されているのである。その条件について、次のようにのべている。

「そこで、私は二種類の敵対性を区別することを提起した。敵対性そのもの—複数の、つまり共通の象徴空間を持たないもの—の間に生じる一と、「闘技性」と私がよぶものの二種類である。後者は、敵対性の異なる表現である。というのも、それは敵同士の関係ではなく、（競技における）対抗者の間の関係に関わるものだからである。（中略）すなわち、対抗者は共通の象徴空間を共有するが、その共通の象徴空間を異なる仕方で組織しようとする点において敵でもあるものなのである。」（Mouffe 2000 : =2006 : 22）

ここでムフが述べているのは、「対抗者」として知覚されるような仕方で構築するのは、共有された共通の象徴空間である、ということであって、その構築が人間に備わるなにがしかの能力に求められている訳ではない、ということである。闘技的な民主的主体（対抗者）として政治に関わるための条件は、この共通の象徴空間にある、というのである。

3 主体化としての民主主義教育の構想

社会化の構想と主体化の構想

ムフの議論に示唆をうけて民主主義教育を構想するものに、Biesta (2011)²がある。

ビエスタによれば、熟議民主主義論は、「よき市民」の形成・促進のために教育を位置づけている。しかし、民主主義の規定から周到に定義されればされるほど、「よき市民」という概念は一つの明白な同一性 **positive identity** として理解され、教育はその同一性の再生産として構想されることになる。ビエスタは、こうしたかたちで構想される民主主義教育を、教育を経由した政治による操作、あるいは、ある秩序への「順応化〔domestication〕」を強いるものだと指摘する。

ビエスタは、このような民主主義教育を、「新参者〔newcomers〕」をある政治的秩序へ準備させる構想だとし、これを「社会化の構想〔socialization conception〕」と呼ぶ。

² Gert Biesta は、イギリス、スターリング大学の教育哲学者。アメリカの教育哲学会（Philosophy of Education Society）の前会長。

しかし、民主主義政治の規定がどんな秩序も所与としないこと（反権威主義）であるとすれば、民主主義教育は、あるべき市民という明白な同一性としてではない、異なった形で構想される必要がある。ビエスタが提案するのは、民主的市民が、常に不確定な政治過程への参加を通して生成されるという構想である。ビエスタは、この構想を「主体化の構想[subjectification conception]」と呼び、これが、ムフの闘技民主主義の延長上にある民主主義教育の構想であるという。

公共領域への参加

上述のように、熟議民主主義は、議論が合意へと収斂していくための条件として、市民がある資質を備える必要があるとする。この考えには、裏を返せば、初期条件（合理的に思考し、公平を尊ぶことができるといった資質）に合致した人々にとってのみ機能するような公共領域が前提にされている、という。

ビエスタによれば、ムフが批判するのはこの公共的領域である。この公共領域の考えでは、それを理性的で公平を尊ぶ市民で満たせば権力 power がもたらす弊害は乗り越えられるというように、権力を理想的には除去される必要があるものとされているのである。しかし、権力的な諸関係は、あらゆる社会的な事柄を構成しており、それが完全に存在し無い公共領域を想定することなど不可能である。民主主義政治にとって重要なのは、公共領域から権力を除去する仕方ではなく、民主的価値（自由と平等）により適切に合致するように、権力のあり様を変革することである（see Mouffe 2000 : =2006 : 36）。

ムフがいう公共領域における政治的主体とは、民主主義を合理的なプロジェクトとして（合理的な存在者が選ぶ政治秩序として）理解する者ではない。その政治的主体は、民主主義政治を、対立や衝突があり、それを通して権力を変革していくまったく歴史的なプロジェクトとして理解する者である。そうした主体についてビエスタは次のように表現する。「民主主義的主体とは、いわゆる、民主主義への欲求 [desire]、より厳密に言えば、目下進展している民主的なあり方の実験に参加する欲求に駆られた人である」（Biesta 2011、p.151）。

市民としての学び

ビエスタは、このように政治的主体を捉えた上で、民主主義教育の構想としての「市民としての学び [civic learning]」について次のように述べる。「市民としての学びとは、民主主義政治という目下遂行中の実験の内在的次元である」。「ここでいう学びは、知識、スキル、コンピテンシーあるいは態度の獲得ではない。それは、民主主義という実験に「曝されること」、実験に参加することと関係するものである。この参加が主体化である。個人は、まちががなく民主主義から学ぶのであって、民主主義のために学ぶのではない。なぜなら、民主政治の根本は「原理的なもの [archic]」ではないからである。」（Biesta 2011 : 152）ビエスタは、民主主義を教えるというよりは、市民としての学びが生じると述べているのである。

注意したいのは、ビエスタは、「市民としての学び」に関わる理論的問題は、学習理論あるいは発達心理学領域の進展によって回答が得られるものではない、としている点である。というのも、主体化としての「市民としての学び」は、まずは、民主的主体についてのわたしたちの理解の仕方に由来するものだからである。

第二節で確認したことの繰り返しになるが、ムフに従えば、民主的主体とは、対立や衝突を通じて権力をより民主的な価値に合致するよう変革する主体であり、同時に、その対立や衝突ではその相手を打ち滅ぼすべき敵としてではなく、対抗者として見なす主体である。この民主的主体

は、なんらかの徳を備えることによって成立するのではなく、対立や衝突をはじめからあるものとみなす公共領域によって、言い換えれば、そのように見なされる共通の象徴空間を共有することによって、成立するものとされる。ムフの闘技的複数主義における民主的主体とは、公共領域のとらえ方から導出される概念である。そして、そうした公共領域のとらえ方自体もまた「政治的」であり、対立や衝突を伴うものである。その意味で、市民としての学びは、学習理論や発達心理学の進歩とは距離がある、というのである。

ところが、ビエスタにおいて、ムフの民主的主体がそのように導出されているにもかかわらず、民主的主体のビエスタの理解には、ムフの理解とのズレを見いだすことができる。それは、ビエスタが、「民主主義的主体とは、いわゆる、民主主義への欲求〔*desire*〕、より厳密に言えば、目下進展している民主的なあり方の実験に参加する欲求に駆られた人である」と述べているなかにあるズレである。

闘技民主主義論の二元論的な理解

ビエスタは、この「民主主義への欲求」について、認知のレベルで作動するものではない、と理解している。では、どのようなレベルで作動するというのだろうか。民主主義への欲求に関わって、ビエスタが歩調を合わせているのが、ルイテンバーグの研究（Ruitenbergh 2010）である。ルイテンバーグが論じているのは、闘技において感情がはたす役割である。

確かに、ムフは次のように述べる。「民主政治の第一の任務は、合理的な一致が可能となるように公共領域から情熱を除去することではなく、民主主義的なデザインへむけて情念を動員することである」（Mouffe 2000 : 13=2006 : 16）。

ムフがここで述べているのは、公共領域を合理性だけで維持しようとするれば情熱を蚊帳の外におき、脱政治化を招くと同時に民族主義など反民主的な潮流を生み出す、ということである

ルイテンバーグによれば、「われわれ」と「彼ら」という対立は、常に感情をともなうものであり、この感情こそが、闘技としての民主主義へと結びつける重要な水路だというのである。感情は、「集合的同一化」と不可分であり、したがって集団と集団の間における対立である「政治的なもの」とも不可分であるからだ。そして、熟議民主主義のような合理的な合意を政治と見なす立場が、非「政治的」であるのは、情念や感情が占める重要な位置を無視し、政治を合理性へと還元してしまうからである。ムフにとって、「政治的なもの」とは「合理性の限界」を孕むもので、そこには対立や敵対に伴う情念や感情が重要な位置をしめるのである。

こうしたムフの主張を確認して、ルイテンバーグは、民主主義への欲求にとって、適切な「政治的な」感情の教育が用意されなければならない、と主張する。つまり、闘技的複数主義における民主的主体に要請されるのは、民主主義への欲求であり、それは、権力にまつわる対立や衝突によって生じる感情、つまり善悪によって生じる道徳的感情とはその対象によって区別された政治的感情、であるという。

このルイテンバーグの見解をもってビエスタの考えを補完すれば、それは、民主主義への欲求が非認知的な政治的感情によって生じるものである、と理解できる。しかし、この見解は、熟議民主主義は理性にその政治の基盤を見だし、闘技民主主義は感情にその政治の基盤を見いだすという、二元論的な理解を伴うのではないだろうか³。

³ こうした理解は、ムフを批判して熟議民主主義を論ずる理論家にも共有されるものである（see 田村哲樹『熟議の理由—民主主義の政治理論』 45～53頁）。

闘技民主主義の基盤を感情に求めることの問題

民主主義への欲求を、感情を基盤として、民主的主体に帰属させる見解には、次のような問題を指摘することができる。

第一に、民主的主体の同一性に関わる問題である。主体化の構想としての「市民としての学び」は、「知識、スキル、コンピテンシーあるいは態度の獲得ではない」とされた。しかし、ピエスタおよびルイテンバーグは、感情を基盤にして闘技する主体が成立すると考え、感情教育の必要に言及している。このことは、適切な「政治的」感情を獲得することを主張しているように解釈できる。とすれば、よい市民を想定する「社会化の構想」と線引きが難しい。

第二に、二元論を根拠なしとするプラグマティズムを積極的に取り入れるムフの議論から、二元論を見いだせる見解を導出していることである。確かに、ムフは、合理性の限界について触れ、感情の重要性をのべている。しかし、そうした区分が二元論でないとするならば、両者の連関もまた述べられなければならない。それがピエスタやルイテンバーグにおいて確認することができるのである。

本発表の立場からすると、ピエスタおよびルイテンバーグが見落としている点があり、それが二元論的理解へと繋がっている。

それは、ムフにおいて、（上の第二節で確認したように）敵対と闘技とを区分するのが、象徴空間の共有とされていた点である。敵は象徴空間を共有しないからこそ敵であり、対抗者はそれを共有するがゆえに別様なあり方が可能な形で対抗者である、ということであった。確認しておきたいのは、闘技の主体が、共通の象徴空間の共有と結びついている点である。

この点を取りこぼさないならば、なぜムフがウィトゲンシュタインに依拠して、合理主義的枠組みのオルタナティブを練り上げたのかが理解できよう。ムフが、ウィトゲンシュタインの視座を導入したのは、「民主主義への忠誠〔ムフは欲求とは言っていない〕の問題を異なる方法で提示できるようになる」（Mouffe 2000 : 65=2006 : 102）ためである。言い換えれば、ムフが言う意味での政治的主体が民主主義への忠誠をもつ（民主的である）のは、民主主義的価値に同一化しているからであるが、「理解する必要があるのは、民主主義的価値が育まれるのは、洗練された合理的協議を提示することによるのでも、自由民主主義の優位性についてコンテクストを超越して勝利を主張することによるのでもないのである」（Mouffe 2000 : 69=2006 : 108）。

4 闘技民主主義の基盤としての生活の諸形式

ウィトゲンシュタインは、感情が実践の基盤であるとする議論を展開したわけではない。ムフによれば、複数性を担保しながら実践の基盤となるのは「生活の諸形式〔forms of life〕である、というのがウィトゲンシュタインの見解である。闘技的複数主義における民主的主体は、象徴空間の共有によって成立するのだが、その共通の象徴空間を、ムフはウィトゲンシュタインを援用し、生活の諸形式として規定したのである。

ムフは『民主主義の逆説』の第三章「ウィトゲンシュタイン、政治理論、民主主義」のなかで、「いかにして民主主義的諸価値と諸制度への強力な支持が確立されうるのか」（108）について述べている。

ムフは、「近代的な民主主義概念における手続きの本質とその役割」をウィトゲンシュタインの議論を参照しながら、考察している。手続きは、熟議民主主義論にとって、合理的な合意を生み

出す際を中心となる概念であり、自由と平等といった民主主義的価値が織り込まれている。

ムフがウィトゲンシュタインの読解から導き出したのは「意見において一致することはまず用いられている言語についての合意でなければならない」という考えである。さらに、その考えは「意見における合意は生活の諸形式における合意である」と強調される。この考えが述べているのは、「ある言葉の定義に同意するだけでは十分ではなく、私たちがそれを〔生活の中で〕用いる仕方についての同意が必要である」ということである（Mouffe 2000：=2006：105）。

熟議民主主義論は、合意の正当性は手続きに由来するとし、その手続きを理性に基づいて普遍的に正当化しようとする構想であった。ウィトゲンシュタインの考えでは、ある手続きに同意が与えられるのは、社会のなかにかかなりの数の「判断における一致」（仕方についての同意）が存在しているからである。ムフは次のように述べる。「ウィトゲンシュタインにとって、規則とはつねに諸実践の要約であり、それらは生活の特殊な形式から切り離しえない」（Mouffe 2000：68=2006：106）。すなわち、規則の正当性は、体系志向の理論家たちが考えているような、論理の一部の破綻によって不成立となるようなものではなく、日常生活における無数の実践によって支えられている。私たちの生活において失敗をしたとしても、すべての破綻になどにならず、大概の場合、やり直しがきくと同様のことである。

そして、手続き（規則）が諸実践の複雑な総体として存在するとすれば、これらの諸実践の存在こそが、手続きへの忠誠を可能にする同一性を構成しているとされる。付言すれば、手続きへの忠誠が成立するのは、まさにそれが具体的に使用されているからである。

ムフは、この考えに従って、リベラル民主主義の正義概念や諸制度を正しく機能させ、維持するために必要な民主主義的諸価値を理解する。つまり、ムフは、諸実践の総体にささえられた民主主義的諸価値を、民主主義的合意の発生の条件であると主張しているのである。

ムフが、理性の限界を主張するのは、理性が意味をなさないということではなく、理性だけでは発生の条件を捉えきれないからである。一般的な関係（ここでいう民主主義的な手続き）を理解することは、ある理論の意味を掴むことの内にあるのではなく、様々な状況の中でそれを利用する能力（知覚能力=身体）の内にある⁴。「ウィトゲンシュタインが私たちに教えているのは、規則に従うただひとつの最高でより「合理的」な方法などあり得ないこと、そしてこの認識こそが、複数主義的な民主主義を構成するのだということである。」（Mouffe 2000：73=2006：114）

ムフは、民主主義がただ一つの条件によって支えられているという発想をやめて、「民主主義ゲーム」が演じられる方法の多様性を承認するべきであると述べる。民主主義的なシチズンシップは、単一のシチズンシップモデルに還元するべきではなく、多様な形態をとりうるのである、と。この考えは、民主主義が複数ありうることを示唆しており、もちろん、それらが衝突しないことを否定するものではない。むしろ、それは「対抗者」同士の競合として理解されるのである。

5 まとめ

ムフによれば、民主主義の同一性が由来するのは、実践の総体としての生活の諸形式であった。実践の総体としての生活の諸形式とは、社会の中ですでに共有されている無数の判断のありかたである。何かを行うとは、生活の諸形式のなかで、創造的なかたちで、構成されるものである。

⁴ その利用の仕方は予め決められているわけではなく複数のであり（使わない自由も、他のものに使う自由もある）、また、異議申し立てに開かれており、創造的なものである。

言い換えれば、民主主義を支える諸価値が由来するのは、言語コミュニケーションとそのあり方が由来している、生活の諸形式自体である。

こうした見解にもとづけば、私たちのあいだでなぜ意見の対立があるのか、なぜ民主的主体として対立や衝突をくりかえしながら権力をより民主的な形に変革しようとするのかを理解することができる。

ムフの闘技論の延長上に構想されるのは、主体化の構想としての民主主義教育論である。それは、合理性あるいは感情に由来するものではなく、生活の諸形式に根ざすものである。民主的主体の成立とは、理性的な能力あるいは適切な政治的感情などを身につけた個人にではなく、複数主義的でありうる実践の総体である生活の諸形式においてなされるものである。

このことは、準公共領域 *proto-public sphere* としての教室空間のとらえ方として、次のような示唆を持つ。民主的主体の形成は、主体の構想として、実際に民主主義に参加することに内在する事柄である。民主主義に参加する学習者は、その際に知識や同一性をあらかじめ身につけることを求められない。他方で、教育者がその教室空間でなさねばならぬことは、規則を尊ぶためには原理を理解しなければならぬ、という考えを捨てることである。そして、規則は、実践の総体としての生活の諸形式に支えられるものであるという視座から、その空間を捉えることである。

学校教育でいえば、教室で、教師と生徒の間には明白な権力的関係がある。このことは、熟議民主主義論からすれば、除去すべき関係となるだろう。しかし、除去してしまつては、教師の教えるという行為そのものの基盤を取り去りかねないことを考えると、熟議民主主義の教育論はあまりにナイーブな発想となる。

闘技的複数主義の視座から教室空間をとらえれば、そこは敵対と権力からなる公共領域であり、教師がもつ権力を無邪気に除去するべきものとするのではない。また、われわれ／かれらという境界線は、何度も引き直されるものである。それは、教師一人対生徒全員という線の引かれ方だけが唯一のものではない。実践の複数性に応じて、いくつもの境界が設定されている。そうした境界を挟んで対立が生じているわけだが、民主主義の学習とは、その対立を無かったことにしたうえで成立するのではなく、その対立をより自由と平等にかなった形で再構成するなかに内在するのである。そして、自由と平等が参照点になるわけだが、それが参照点であるのは、言葉（議論）だけでなく、日頃の生活の中で共有している諸実践に支えられているからである。

〈文献〉

Biesta, G. J.J. 2011 “The Ignorant Citizen: Mouffe, Rancie`re, and the Subject of Democratic Education,” *Studies in Philosophy and Education*, 30:141–153

Enslin, P. et al., 2001 “Deliberative democracy, diversity and the challenges of citizenship education,” *Journal of Philosophy of Education*

Mouffe, C., 2000 *The Democratic Paradox*, Verso (=2006 ムフ、ジャンタル『民主主義の逆説』以文社)

Ruitenberg, C., 2009 “Educating political adversaries,” *Studies in Philosophy and Education*, 28(3), 269–281.